「色」を詠み込んだ夏の句に学ぶ

今瀬　一博

前回のこのコーナーでは、「白」と他の色とを対比させている夏の作品（季語に「白」を含むもの除く）を紹介しました。今回は様々な色を詠み込んだ夏の句の紹介を通して、色が一句に及ぼす影響や効果を味わいつつ鑑賞してもらいたいと思います。我々の作句の際にも参考になるものと思います。

前回も述べましたが、一年で最も暑い季節である「夏」は、私達を取り巻く自然にも勢いの溢れる季節です。周囲に緑が溢れ、季語も含め「青」や「緑」の付く句が数多くあります。

プラタナス夜もみどりなる夏は来ぬ　　石田　波郷

この波郷の句は夏の涼やかさだけではなく、植物の勢いや夏への期待感も感じさせます。「夜もみどりなる」は、五月闇の中のみどりという清新な発見で、この色は動きません。

若竹や竹より出でて青き事　　立花　北枝

浴衣着て竹屋に竹の青さ見ゆ　　飯田　龍太

「竹」と「青」という色の取合せで、共通する作品を二句挙げました。北枝の句は平明で素朴な味わいがある作品です。下五の「青き事」は作者の感慨ですが、「若竹」の勢いや存在感を「青」という色を詠み込んで際立たせます。龍太の句は、「竹屋」の竹の「青さ」ですから、青さの残る伐られた竹でしょう。乾き始めた竹の青と、さっぱりとした「浴衣」との取合せの妙は、この作者の真骨頂です。平明に叙述した「青」と、取合せによって際立つ「青」。いずれも一句の中で揺るがない色の出し方です。

陰に生る麦尊けれ青山河　　佐藤　鬼房

「陰に生る麦」を作者は『古事記』からの発想と述べていますが、作者の故郷みちのくの、母なる「青山河」に黄熟する「麦」を思って鑑賞すべきです。その点で、夏の季感とともに、風土性、土俗性を感じる作品です。「尊けれ」も、大らかな「青」の世界を背景とした「麦」ゆえに納得がいきます。「青」を詠み込まなければ、この句の大らかさや豊かさは出なかったでしょう。

丈低き麦に南部の青やませ　　木附沢麦青

前句と同じ「麦」を詠んだ作品です。「やませ」は、夏に北海道や東北地方に吹き込み冷害を引き起こす、冷湿な北東風のこと。先の佐藤鬼房にも「やませ来るいたちのやうにしなやかに」があります。掲句は「南部」という言葉以上に「丈低き」に風土性を感じます。「青」という言葉は、広がりとともに、「やませ」の冷たさと厳しさを読者に伝えます。

少年に五月ぞ青し悲しめり　　高柳　重信

夏初めの五月は、一般的に明るさや喜びを伴いますが、どんな喜びの後にも悲しみがつきまとう少年期は、緑の五月も青く感じられると言うのでしょう。五月に周囲の世界が緑に染まるのは事実、少年にはそれが青く映るというのは作者にとっての真実です。このような逆説的詠み方や色の断じ方は難しいですが、参考にすべきです。この句の色はやはり「緑」でなく「青」です。

蛍獲て少年の指みどりなり　　山口　誓子

指青し草より蛍掬ふとき　　大岳水一路

一方こちらの二句は、蛍の光を詠んだ作品です。あの色を何色と捉えるかはその人の感性とも関わってくるので決まった詠み方はありませんが、色を出してこのくらい断定的に詠むのが時には効果的です。誓子の句は、少年ゆえに、より柔らかな印象を与える「みどり」が効いているように思います。水一路の句は、闇の中の蛍が照らす微かな草の色も見える句なので、「みどり」では明るすぎます。「指青し」の「青」は動かないと思います。

玉虫の羽のみどりは推古より　　山口　青邨

鮮やかな「玉虫」の色に着目して詠んだ作品です。飛鳥時代の優品である「玉虫厨子」を詠んだ作品ですが、敷き詰められた玉虫の羽を端的に「みどり」と言い切ることで、推古天皇の時代が、現代の我々の目の前に、実感をもってよみがえります。

では、夏の句に多い「青」、「緑」を離れ、他の色を詠み込んだ夏の句を見てみましょう。

跳ぶ時の内股しろき蟇　　能村登四郎

登四郎の生き物を詠んだこの句は、「蟇」の「内股」という、普段は見せることのない部位に着目しています。そしてその色を「しろき」と描写することで、「蟇」の存在を現実感をもって伝えます。このように詠まれると、醜怪とも見える「蟇」の奥にある美しさのようなものが感じられます。「白」の不思議です。

続いて、「赤」を詠み込んだ夏の作品です。

赤い花咲いて六月了りけり　　星野麥丘人

この句に詠まれた花は、「赤い花」と有るだけで名前は明かされません。後から読者が様々に赤い花を想像しますが、基本的構成は「赤（い花）」と「六月了りけり」という感慨の取合せです。「六月」は「水無月」。一年で最も瑞々しく、国土全体が緑に覆われる月です。その月をきっぱりと終えて、いよいよ盛夏へと入っていく合図としての「（花の）赤」は、全く動きません。

閻王の紅蓮の舌の埃かな　　富安　風生

「紅蓮」は、猛火の炎の色に喩える言葉です。ですからただの「赤」と描写するより、燃えさかる炎の様が動的にイメージされます。この表現の変え方は、色を詠む際の参考にしたいところです。この句の季語は、七月に閻魔様の大斎日が有るため、「閻王」で夏季です。忿怒の像の赤い舌を詠んだ作品は他にも有りますが、その奥の「舌の埃」に目を留めたのは秀逸です。長く人々の信仰を集めてきた像の貫禄が伝わり、畏ろしさも際立ちます。

黒く又赤し桑の実なつかしき　　高野　素十

桜の実紅経てむらさき吾子生る　　中村草田男

最後に紹介するこの二句は、植物の実の色の変化、もしくは色の違いを詠みます。その上で素十句は自分の内面の感慨に、草田男句は吾子誕生の喜びという、心の状態に展開します。「桑の実」もどちらか一色だったら、「なつかしき」という感慨は湧かないでしょう。「桜の実」も、「紅経て」と色の変化を詠んだからこそ、「吾子生る」の感慨も深いものになるのです。一つの色を詠み込むか、色の違いや変化を詠むか、私達が作品を詠む際にも、悩ましいかも知れませんが、挑戦したい方法の一つです。

今回はここまで、色を詠み込んだ夏の句を、鑑賞してきましたが、私自身も作品鑑賞を通して背後の夏を感じ取ることができ、力をいただいたように思いました。最近の夏は異常な暑さで色を失っているようにも思われます。色彩豊かな夏の句の鑑賞を通して、夏の勢いと暑さ、そして涼しさを堪能したいものです。